

顕彰状

和泉流狂言方、日本能楽会会員である野村万作氏は、狂言名人で人間国宝であった六世野村万蔵の次男（本名は野村二郎）として、1931年東京に生まれた。1950年に万作を襲名、1953年に早稲田大学第一文学部を卒業した。幼少より祖父萬斎、および父六世万蔵に師事し、兄七世万蔵とともに狂言界の若きホープとして活躍する一方、能界の革命児であった観世寿夫のよき理解者、共演者として、現代劇をはじめとして、新才能・新作狂言や実験的な演劇活動にも積極的に参画し、独自の地歩を築いた。この間、芸術祭奨励賞・優秀賞を数次にわたり受賞、1977年には、大曲「釣狐」の連続公演により芸術祭大賞を受賞した。このほか、1979年紀伊国屋演劇賞、1985年観世寿夫記念法政大学能楽賞など受賞は多数に及ぶ。狂言の芸術性を広く社会一般に認識させた功績も大きい。また、早稲田大学文学部演劇専修において、講師を勤めた。現在は「万作の会」を主宰するかたわら、野村萬斎・石田幸雄ら、狂言界の若き俊秀を数多く指導し、狂言研究者の弟子も内外に少なくない。

万作氏の芸は、本来切れ味の鋭い精緻な芸風で、よく狂言の洒脱味を描出してきたが、「釣狐」の連続公演を果たした後は、そこに次第に円熟の度を加え、たんなる笑いを目指すばかりではなく、完成された端正な舞台姿と、人間性を余すところ無く描く演技力とによって、現在ではもっともすぐれた狂言役者として能楽界を代表する存在である。万作氏の備える狂言への見識や卓越した芸風は、若年期より演劇全般を幅広く研究し、試行錯誤を繰り返した成果であるが、昨年古稀を迎えての芸境の充実ぶりには目を見張るものがある。また早稲田大学演劇博物館が企画・制作し、昨年10月に製品版が完成した狂言DVD「野村万作・萬斎—狂言でござる—」においては、監修の一翼を担って企画を指導し、自ら主演して多数のすぐれた舞台映像を収録せしめ、古典芸能の世界に大きな足跡を残した。本学出身の古典芸能の芸術家としては、能楽界において、宝生流松本恵雄氏に次ぐ重鎮となりつつある。

以上の業績と早稲田大学に対する貢献を称え、早稲田大学は校友野村万作氏を早稲田大学芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

2002年3月25日

早稲田大学